



## 中井清太夫という男

神戸大学 経済経営研究所  
講師 高槻 泰郎

気になっている人物がいる。と言っても現代に生きる人物ではなく、江戸時代の中期、18世紀後期に生きた人物である。

名前は中井清太夫（清大夫とも）。江戸幕府の財政を担当した勘定所という部局の役人から、最終的には代官となった人物である。

素性について、大和国の百姓の次男に生まれ、江戸に出て御徒になったと伝える史料もあるが<sup>(1)</sup>、正確には分からない。中井のキャリアが確実に判明するのは安永元年（1772）以降であり、この時点で勘定所の勘定という職についている<sup>(2)</sup>。勘定とは勘定所の下僚で、設置された時期は定かではないが、寛永15年（1638）に12名、享保8年（1723）に130名、同18年に186名、寛政8年（1796）に232名、嘉永2年（1849）に215名の定員が定められている<sup>(3)</sup>。安永初年には勘定所の勘定という肩書きで、大坂方面で御用を務めていたことが分かっている。

『江戸幕府代官履歴辞典<sup>(4)</sup>』によれば、安永3年（1774）から天明7年（1787）まで、甲州代官として奉職した後、小名浜代官へと転じ、寛政3年（1791）8月13日には、「切米召放」という形で免職されている。免職された理由としては、甲斐国での新田開発地域の検地に際して、農民に難儀をかけ、粗略の取り扱いが多かったことが指摘されている<sup>(5)</sup>。

現段階で明らかにされている中井のキャリアは以上であるが、さしたる特徴もない一吏僚といった印象を受ける方も多いただろう。しかし、中井ほどエピソードの豊富な吏僚も珍しい。

最初に、中井が甲州代官として奉職していた時の逸話を紹介しよう<sup>(6)</sup>。中井は山間地の多い甲斐国に適した農作物とは何かを考えた結果、幕府の許しを得て、九州から馬鈴薯を取り寄せ、甲斐国八代郡九一色郷の14ヶ村で試作している。はたして試作は成功し、馬鈴薯栽培は「甲州芋」と喧伝されて周辺各地に広がっていった。それ以来、馬鈴薯は「清太夫芋」あるいは「清太芋」と呼ばれ、竜泉寺（現・山梨県上野原市）には「芋大明神」と

(1) 「よしの冊子」（森銑三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦編『随筆百花苑 第八巻』中央公論社、1980年）59頁、天明7年（1787）11月～同8年4月の記事。

(2) 『官府御沙汰略記』安永元年2月18日条には、「御勘定中井清太夫時服二金二枚○大坂表御用トシテ罷越シ候、御暇ニ付賜之、○右各於御祐筆部屋縁頼松平右近将監〔武元・老中〕申渡之、水野出羽守〔忠友・若年寄〕侍座」とあり（解題、7頁）、大坂方面で何らかの職務を担当し、褒賞されていたことが分かる。

(3) 大石学編『江戸幕府大辞典』吉川弘文館、2009年、「勘定」の項。

(4) 西沢淳男『江戸幕府代官履歴辞典』岩田書院、2001年、386頁。

(5) 村上直『江戸幕府の代官』国書刊行会、1970年、159頁。

(6) 以下、特に断りが無い限り、村上掲書、154-159頁の記述に基づく。

して中井を祀る碑が建っているほどである<sup>(7)</sup>。興味のある読者は「芋大明神」でインターネット検索をかけて頂きたい。興味深い記事の数々に行き当たるはずである。

領民は中井に感謝し、頌徳碑を建てることを願い出たところ、中井は「代官として当然のことをしたまで」とこれを聞き入れなかったと言う。結局、寛政9年(1797)5月、現在の山梨県西八代郡三珠町に頌徳碑が建てられることになる。文政4年(1821)には、甲府市塩部一丁目神明神社に、中井の事績に感謝する石祠が建てられていることから、領民は長らくその事績を忘れず、感謝していたことが窺える。代官を免職された後も、甲州の民の心を掴んでいた中井は、名代官と呼ばれるにふさわしかったと言えるだろう。

ここで中井のキャリアを思い返して頂きたい。甲斐での新田開発地域の検地に際して、農民に難儀をかけ、粗略の取り扱いが多かったことが免職の理由であったが、かくまで領民に愛された中井が、なぜそのような形でキャリアを終えることになったのか。

その手がかりを得るために、当時の江戸城内における噂話などを記録した「よしの冊子」という史料から、中井に関する記述を見ていきたい。あくまでも噂話であって、真偽の程は定かではないが、中井に対する当時の人々の評価を知るには格好の素材である。小名浜代官を免職される少し前の記事に、以下のようなものがある。

【寛政元年(1789)4月26日-6月12日<sup>(8)</sup>】

(史料原文)

一、中井ハけいきを見る男ニて、世風ニかかり候由。田沼時分にハ度々新田の事杯申立、此節ハ専御儉約の工夫を仕よし。併至て精勤ニて、何事も日本国中の事を存候ハぬハ無之、御ふしんと申せば爰ニ良材御座候、爰ニ奇石御ざ候と申立、其外山川の事など委く、何を御尋御ざ候ても、御答申上候由。至てセ話やきニて色々の工夫仕候由。甲州御代官之節、上方より牛を三疋自分宅へ引寄、百姓へ牛ニて田をすき候が宜しきや、馬ニてすき候が宜しきやと、すきくらべさせ候事も御ざ候由。甲州ニ罷在候節、常の帯を甲州木綿ニて拵へ結ひ候由。当時ニてもやはり帯ハ木綿ニて、儉約ハ上も無之と申した。利口ハけしからず利口のよし。

(現代語訳)

一、中井は空気を読む男で、田沼時代にはたびたび新田開発などを申し出ていたが、松平定信が老中となって以降は、専ら儉約の工夫を考えているようである。しかし、職務に精勤する男で、日本国中で知らぬことはなく、土木工事となれば良材・奇石のありかを知っているし、山川のことなどもお尋ねがあり次第、答えてしまう。世話焼きなところがあり、色々と工夫をする男とのことである。甲州代官であった頃(この時点で中井は小名浜代官)、上方から牛を3頭連れてきて、田を鋤くには牛がよいか、馬がよいか、百姓に試させていたと言う。また今でも帯には甲州木綿を用いて、儉約にはこれが一番である、などと言っているそうだ。利口者はけしからんほどに利口であるとのこと。

---

(7) 村上前掲書には、天保7年(1836)刊行の高野長英「二物考」に、馬鈴薯の和名として、「清太夫イモ」とあることが紹介されている。

(8) 前掲『随筆百花苑 第八巻』408頁。現代語訳は意識である。史料の性質からして、ですます調で訳出すべきであるが、である調を採用した。以下、同じ。

田沼意次が権勢を振るっていた時分は、「御益」に繋がりそうなことは積極的に取り組む雰囲気があった中で<sup>(9)</sup>、中井は新田開発をしきりに提案していた一方、田沼意次が失脚し、儉約を掲げる松平定信が実権を握ってからは儉約に勤しんでいたと言う。それ自体、決して悪いことではないはずだが、それを他人に吹聴するあたりが「けしからず利口」と言われてしまう要因かもしれない。否定的に見られながらも、中井の吏僚としての能力は高く評価されていたと見てよい。

【寛政2年（1790）2月15日-28日<sup>(10)</sup>】

（史料原文）

一、中井清太夫、此節甲州の百姓ニ箱訴ニあひ、迷惑致居候由のさた。余り人を讒するから自分も人に訴へらるとさた仕候由。

（現代語訳）

一、中井清太夫は、この度、甲州の百姓から目安箱への投書を受けて迷惑しているとのことだ。あまり讒言ばかりするものだから、自分も人に訴えられるのだろうと噂しているとのことである。

甲州の百姓から告発された中井清太夫に対して、自業自得であると江戸城内では噂されていたことが分かる。

【寛政3年（1791）1月1日-15日】

一、中井清太夫、旧冬封印等尋も有之候由。世上ニてハ引負も有之、あたりまへならバ遠島ニ相成り可申候へ共、何をいふも弾正殿の極ひいきだから、御役御免位で済であらふ。余り人を取て落した報ひじや。よいきびじや。今迄御代官の遠島ニ成たハ、皆中井がしわざだ、中井をも追放ぐらいにハしてもよかるふ。とさた仕候由<sup>(11)</sup>。

（現代語訳）

一、中井清太夫について、甲州代官時代に公金の横領があったのだから、通例では遠島になるであろうが、何と言っても若年寄の本多<sup>ただかず</sup>忠籌からの覚えがめでたいから、御役御免ぐらいで済むであろう、讒言によって人を陥れた報いだ、いい気味だ、これまで代官で遠島にされたものは全て中井の仕業だ、中井も追放ぐらいにはしてもよかろう、と世間では噂されているとのことである。

冒頭に「封印」云々とある箇所の意味がとれないが、中井清太夫が受けるべき処罰について、まさに言いたい放題の噂が立てられていたことが分かる<sup>(12)</sup>。そしてこの約7ヶ月後に、中井は「切米召放」の上、小名浜代官を免職となっている。

---

(9) 藤田覚『田沼意次—御不審を蒙ること、身に覚えなし—』ミネルヴァ書房、2007年。

(10) 「よしの冊子」（森銑三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦編『随筆百花苑 第九巻』中央公論社、1981年）103頁。

(11) 前掲『随筆百花苑 第九巻』246頁。

(12) 「よしの冊子」には、ここで紹介した以外にも、中井に関する記事が散見されるが、いずれも否定的な取り上げられ方をしている。

「よしの冊子」には中井に限らず、様々な人に向けられた悪口が記録されているが、中井へのそれは群を抜いて多い。ここまで徹底的に嫌われていると、かえって清々しい気すら起こってくるから不思議である。

以上、中井清太夫という、善悪定かならぬ男についてあらましを紹介してきたが、筆者の不勉強により、中井が小名浜代官を罷免された本当の理由は詳らかではない。実績から見れば中井は確かに有能であった。馬鈴薯を九州から取り寄せて試作し、甲州一带にその栽培を根付かせた功績は、不朽の業績と言っていい。しかし、その突出した才ゆえか、江戸城内での評判は頗る悪かった。また、箱訴が事実であるとすれば、中井のことを快く思っていない農民もいたらしい。

民から慕われた名代官でありながら、才あるあまりに江戸城内で嫌われ、免職の憂き目に遭った悲劇の人物と評価するも、人を蹴落としてでも上に行こうとした嫌な奴と評価するも、読者各位の自由である。いずれにせよ、中井は史料から人物像を確定することの難しさを我々に教えてくれる。中井に限らず、ある人物の歴史的な位置づけを考える作業は、多方面から慎重に進めねばならないのであろうし、現在我々が同時代に生きる人々を評価する際にも、同様の教訓が当てはまるとも言えるだろう。

先に述べた通り、中井に関するエピソードは豊富である。実は筆者も、甲州代官に就任する前の彼に遭遇している。勘定所の役人として、筆者が研究対象とする大坂米市場にも出張し、大坂を代表する二大豪商、鴻池屋善右衛門と加島屋久右衛門と対峙しているのであるが、この話は稿をあらためて紹介したい。